外2-27

早稲田大学大学院理工学研究科

博 士 論 文 概 要

論 文 題 目

北ドイツ表現主義建築の研究

申 請 者
長谷川 章
Hasegawa Akira

平成 2 年 11月

理 1466 (1715)

ドイツ表現主義建築とはまさにドイツにおける近代建築運動であった。しかし表現主義が近代建築史の中で認められ始めたのは，1960年代のR．バンハム（Reyner Banham）やD．シャープ（Dennis Sharp）等の研究からであり，近代建築史の中で一つの時代様式として位置付けられたのは1970年代まで待たねばならない。特に1973年のW．ペーント（Wolfgang Pehnt）による研究は総論としてのドイツ表現主義建築研究の集大成といえよう。今日においてはドイツ表現主義建築に関する研究は作品論・作家論・思潮論を含め欧米を中心に精力的に進められている。しかしその多彩な建築現象の全容が明らかになるに従って，逆にドイツ表現主義という建築現象を一律に一つの概念で括ることが事実にそぐわないことが判明してきた。即ちドイツ表現主義建築は更に特徴のある幾つかの建築現象に分けて捉えられる可能性が示唆され始めてきたのである。

本論文はこれまで一律に捉えられてきたドイツ表現主義の建築現象の中でも，今まで単なる地方の表現主義として，あるいはベルリンを中心とするドイツ表現主義の亜流として捉えられてきた北ドイツを中心としたドイツ表現主義の建築に着目したものである。そしてこれまでの近代建築史の流れに沿った表層的な解釈ではなく，北ドイツにおける当時の社会・経済・文化及び古来の伝統・歴史・民族といった内的因子にまで考察を進め，その建築現象の総合的把握を試みる。即ち，その北ドイツ表現主義に及ぼした内的因子の影響や因果関係を解明していくことにより，北ドイツ表現主義建築の独自性を論証し，ドイツ表現主義という大きな近代建築運動の中において明確な位置付けを行い，その意義を明らかにすることを志したものである。

本論文は序論3章，本論4篇12章47節，補論5章及び結論から成るが，以下に各章の概要を述べる。

序論では近代建築史におけるドイツ表現主義建築の研究の不備や問題点を指摘し，上述のような研究目的と研究方法及び本論文の構成について述べている。

本論第1篇「北ドイツ表現主義建築の史的背景」は2章から成り，北ドイツという地域の独自の特性を歴史・文化・政治・経済等から述べ，また表現主義前夜とも言うべき19世紀末の北ドイツの文化・社会的状況について詳述した。これは第3篇・第4篇で後述する北ドイツ表現主義建築の特性を解明する上で不可欠の論考となる。

第1章「北ドイツの文化」では，北ドイツという地域が言語学的にも地理的にも宗教的にも一つの文化圏を形成していることを明らかにした。即ち北ドイツは12世紀のハンザ都市同盟の時代までは主に北欧文化圏に属しており，北欧神話の支配した地域であった。そしてこの地域特有の建築様式としてファッハヴェルク様式や煉瓦ゴシック様式が栄えるなど，北ドイツは中部・南部ドイツとは異なった建築文化の伝統をもった地域であったのである。

第2章「北ドイツの経済と社会」では，19世紀末のドイツ経済の目覚ましい

発展とそれに伴う社会的歪の反動から生まれた青年運動や生活改革運動の社会現象について詳述した。これは旧来の農村的生活共同体の崩壊に反発する若者たちを中心に生まれた運動であり，当初彼等は「反都市」「反産業化社会」を主張した。しかし後にこの運動はゲルマン民族の伝統を現代に再建する故郷保護運動へと結び付いていった。こうした運動が何故北ドイツの大都市を中心に生じたかその原因を明らかにし，それが如何に社会全体に影響を及したかについて述べた。

第2篇「北ドイツ表現主義の建築」は2章から成り，ドイツ表現主義建築の概説と，その中における北ドイツ表現主義建築の位置付けを行った。

第1章「北ドイツ表現主義建築の歴史」では「表現主義」という呼称の語源や表現主義建築全体の歴史的流れの中で「北ドイツ表現主義建築」を位置付け，第2章「北ドイツ表現主義建築の特徴」では表現主義建築の造形的な特性，思想的な特徴を定義し，その中で北ドイツ表現主義建築の位置付けを行った。

第3篇「ハンブルクの北ドイツ表現主義建築」は5章からなり，北ドイツの中心的都市ハンブルクにおいて展開した北ドイツ表現主義の建築現象を具体的に論究した。

第1章「ハンブルクの煉瓦建築の歴史」では煉瓦を主材としたハンブルクの北ドイツ表現主義建築というものが突然生まれたのではなく，古くファッハヴェルク様式の農家や中世の煉瓦ゴシック建築から近代に至るまでの連綿とした煉瓦建築の歴史の延長として捉えられることを明らかにした。

第2章「ハノーヴァー派の建築」では表現主義前夜とも言うべき19世紀末において，煉瓦ゴシックの造形の模倣としてのネオ・ゴシックを展開したC．W．ハーゼ（Conrad Wilhelm Hase）率いるハノーヴァー派の建築家がハンブルクの建築に大きな影響を及ぼし，その結果ハンブルクの倉庫建築群がネオ・ゴシックの煉瓦建築で建設された経緯を明らかにした。　第3章「故郷保護運動」ではこうした煉瓦ゴシックがハンブルクに導入された社会的背景を述べ，何故ハンブルクでは煉瓦ゴシックが奨励されたかを述べた。

第4章「F．シューマッハー」では，当時の都市建築主監であったF．シューマッハー（Fritz Schumacher）が果たした役割を述べた。即ち，彼が著した『現代煉瓦建築の本質』をまず取り上げた。　ここで彼は歴史様式の模倣ではなく，煉瓦という素材自身の持つ特性を徹底的に解析し，煉瓦の持つ合理性・経済性・耐候性が近代建築に相応しい素材であることを主張した。そして彼が実際に設計した建築を分析し，北ドイツ表現主義建築としての特徴がすでに認められることを指摘した。こうした彼の活躍により伝統としての煉瓦建築が近代としての煉瓦建築へと橋渡しされたことを明らかにした。

第5章「F．ヘーガー」では北ドイツ表現主義建築の代表作ともいえるチリハウスを設計した建築家F．ヘーガー（Fritz Höger）を取り上げた。彼の作品において前章のF．シューマッハーによる近代煉瓦建築の理論がいかに実践さ

れ，北ドイツ表現主義として展開していったかを解明した．こうして彼が伝統と近代を融合させ特異な近代建築を生み出したのだが，その彼の建築作品の北ドイツ表現主義としての造形的特徴について解析した．

第４篇「ヴォルプスヴェーデの北ドイツ表現主義建築」は３章からなり，北ドイツのもう一つの大都市ブレーメンの郊外に生まれたヴォルプスヴェーデ芸術家村に注目した．特にそこで活躍したもと彫刻家Ｂ．ヘットガー（Ｂernhard Ｈoetger）の建築作品における北ドイツ表現主義について論究したものである．

第１章「ヴォルプスヴェーデ芸術家村」では，当時北ドイツで生じた青年運動の一つであったコロニー運動を考察し，ヴォルプスヴェーデ芸術家村がこうした当時の「反都市」を掲げたコロニー運動のなかに位置付けられることを論証した．また並行して，当時建築家の活躍したたダルムシュタトやハーゲンの芸術家村を取り上げ比較検討することにより，その成立の過程や目的が大きく相違することを述べ，ヴォルプスヴェーデ芸術家村の位置付けを明確にした．

第２章「Ｂ．ヘットガー」では，このヴォルプスヴェーデ芸術家村で活躍した建築家Ｂ．ヘットガーを取り挙げ，彼の主な建築作品の特性を解析した．即ち彼は，ここで積極的に北ドイツの農家の形やその建築様式であるファッハヴェルク様式及び北ドイツの伝統的建築素材である煉瓦を取り入れた表現主義建築を造った．しかし彼の作品が特異なのは北欧神話の伝説をテーマに建築を造ったことである．こうした一連の彼の設計思想を，当時の故郷保護運動から解明し，ヘットガーの建築が北ドイツ表現主義的であることを論証した．

第３章「ヴォルプスヴェーデの芸術家たち」ではヴォルプスヴェーデ芸術家村に活躍したＨ．フォーゲラー（Ｈeinrich Ｖogeler），Ｌ．ミッゲ（Ｌebere-cht Ｍigge），Ｐ．モーダーゾーン＝ベッカー（Ｐaula Ｍodersohn-Ｂecker）の３人を取り上げ，それぞれが当時の青年運動や生活改革運動の中心的な活躍をしまた北ドイツ表現主義芸術に参加していた人物であることを明らかにした．

補論は５章からなる．ここでは本論と関連の深い，北ドイツ表現主義を語るうえで看過できない幾つかの重要な現象を取り上げた．

第１章「ドイツ工作連盟」，第２章「ドイツ田園都市協会」では共に生活改革運動から派生した団体であることを論証した．第３章「北ドイツ表現主義の出版社」では出版文化の側面から当時の北ドイツ表現主義運動を解明した．また第４章「北ドイツ表現主義の芸術家」では，建築ばかりでなく絵画や彫刻における北ドイツ表現主義の作品と作家について言及し，北ドイツ表現主義建築との特性の共通点について述べたものである．第５章「北ドイツ表現主義建築の展開」ではこうした北ドイツ表現主義建築が地域の伝統や歴史と無関係に，一つの建築様式として伝播し，各地に造られた実例を上げ，その特徴について考察を加えた．

結論は以上の本論４篇12章において考察・解明しえた諸点の要約を総括的に掲げて結論としている．